

老年期の性意識・性行動に関する調査研究 I¹⁾

福屋 武人・浅井 義弘
鷓沼 秀行・戸沢 純子

はじめに

従来の老年期の性活動に関する調査において、

- 1) 女性に比べて男性の方が性交渉の頻度は高く(井上・荒木・大川, 1991; Bretschneider & McCoy, 1988; Pfeiffer, Verwoerd & Davis, 1972),
- 2) 女性に比べて男性の方が性的欲求もまた高く(井上ら, 1991; 大工原, 1991; Bretschneider et al., 1988; 高橋, 1984; Pfeiffer et al., 1972),
- 3) 年齢に対応して性交渉, 性的欲求ともに減少の傾向が認められはするが全く無くなるわけではなく(井上ら, 1991; 大工原, 1991; Bretschneider et al., 1988; 吉沢, 1986; Pfeiffer et al., 1972; Kinsey, Pomeroy & Martin, 1955),
- 4) 特に女性の場合, 配偶者の有無が性交渉・性的欲求の有無にきわめて密接に関連し(大工原, 1991; 高橋, 1984; Pfeiffer et al., 1972),
- 5) 老年期における性活動は青年期, 壮年期の性活動と相関関係を持つ(Bretschneider et al., 1988)などといった諸結果が報告されてきた。

老年期の心理的諸側面に関する研究は, 人格, 適応など様々な諸側面からの研究が行われている。しかしながら井上ら(1991)が指摘するように, 日本における老年期の性活動に関する研究はきわめて少なく, また生活の質と老年期の性活動との関連を考察することは現状において困難であるという。

われわれの研究は, 老年期の性活動を取り巻く諸側面を調査することにある。従来の研究においてすでに指摘されてきた通り, 老年期の性活動における実際の性交渉の有無と関連すると考えられる要因には, 年齢段階, 性差, 健康の状態, 異性への関心, 交際のあり方, 配偶者の有無などが挙げられよう。なかでもわれわれの研究で最も関心を抱いている問題は, 老年期の

¹⁾本研究は, 平成4年度ユニバーサル財団助成金(代表 福屋武人)の補助を受けて行われた。本研究を実施するにあたり, ご助言を賜りました川村学園女子大学 加藤正泰教授に深く感謝致します。

性活動に関わる異性・恋愛の感情とはいかなるものか、そしてそれは青年期における恋愛感情とはどのような点で異なり、どのような点において重複するものなのか、についてである。

今回の報告では、この関心に対する一部分としての、老年期の性交渉の有無と恋愛感情を含んだ結婚や日常生活のあり様とがどのような関わり方をするのかを中心に調査、報告することとした。

多くの研究において指摘された通り、性活動は加齢によってある日突然に消失するものではない。しかしながら、老年期の性に関する誤解や偏見が多くの研究によって報告されている。吉沢(1986)は、医師や一般の市民などにみられる偏見、誤解を分類したところ、1)老人は無性欲、2)老人の性行為に対する不潔視、3)老人に対する聖人像の押し付け、4)老人の性活動は病気の原因になる、などが挙げられるという。このような誤解や偏見は社会的制約をうむことが予想される。

そこでわれわれはまず第一に老年期の性に対する偏見が、老年期に達していない人々の中で、どのようなものであるのかを具体的に調査することにした。

次に先に述べた通り、老年期の性活動に関する調査として、60歳以上80歳未満の男女に対して、

- 1) 生活・健康の状態
- 2) 性行動・性的興味
- 3) 結婚生活のあり様
- 4) 異性に対する感情・恋愛
- 5) 家族などとの対人関係
- 6) 老いに対する受容感

を含んだ74の質問項目からなる個別調査を行った。老年期の性活動に主として関連するのはどのような要因であるのかを、性別、配偶者の有無と関連させて考察した。

I. 老年期の性に対する偏見，態度についての調査

目的

まず第一の調査は、老年期の性にとって社会的な制約を生むことが予想される誤解や偏見は従来の諸研究に指摘される通りに実際にあるのか、について行われた。われわれの文献収集によれば、老年期の性に対して誤解や偏見が多くあることを指摘する文献が少なくないが、実際

にどの点がどの様に誤解されているのかを具体的にデータとして示した研究は見つけることが出来なかった。そこで誤解や偏見があるとするればどの様な点においてであるのかを、女子学生とその家族の二つの年代において、比較検討を行った。

われわれの調査項目は、一般的な性に対する態度と、老年期の性に対する態度からなっていた。

方法

被験者：女子大学学生213名，女子学生の家族40歳以上女性29名，男性4名の計246名であった。

質問項目：

表1に示す通り一般的な性に対する態度の項目は5項目，老年期の性に関する態度は15項目からなった。回答は「はい」か「いいえ」かの2件法で行った。老年期の性に対する態度は，吉沢(1986)から要約，抜粋された。(なお表1には女子大学生213名の回答度数も付記した)。

結果と考察

1-1. 女子大学生における老年期の性に関する態度

(1) 各質問項目に対する“はい・いいえ”2件法の結果を表1に示す。“はい”と“いいえ”の回答数の比は，質問⑫“高齢者にも自慰行為がある”以外は統計的に有意な差異が認められた。すなわち19項目については肯定あるいは否定のいずれか一方の態度を取るものが多かった。つまり“多数意見”が存在した。

多数意見についてその内容を見ると，まず性一般に対しては“同性愛”“性の快樂追求”“現代社会の性”については否定的であったが，“性の話”“婚前交渉”については肯定的であって，全体として必ずしも否定的(保守的)とも，受容的(寛容)とも言いきれなかった。したがって多数意見において，性に対する偏見が存在するとは言えなかった。

これに対して，老年期の性に対する多数意見では，老年期の性行為に関する質問(⑥～⑬，ただし⑫を除く)において，老年期における性行為の存在を推定あるいは認める者の方が多数であった。また，老年期の結婚に関する質問(⑭～⑯)においてはいずれも結婚も肯定的に捉えている。老年期の社会生活・対人行動について(⑰～⑳)は，積極的行動に好意的である反面，“茶飲み友達”程度という関係を支持するという点が特徴的であった。

全体として老年期の性に対しては肯定的・受容的態度がうかがえたが，これは性一般に対す

表1. 調査に用いられた質問項目と調査結果
(数字は回答者数：女子大学生213名，ただし無回答項目を含む)

	はい	いいえ
一般的な性に対する態度（5項目）		
①同性愛は不自然だ	125	83
②性の話をするのは恥ずかしいことだ	54	154
③結婚前の性交渉は不道德なことだ	23	185
④快樂だけの性は汚らわしい	119	88
⑤現代は性が乱れている	180	27
老年期の性に対する態度（15項目）		
⑥高齢者になったら性欲はなくなる	55	151
⑦高齢者の性行為は健全なことだ	133	75
⑧性欲をもつ高齢者はおかしい	15	193
⑨高齢者の性行為は健康に毒だ	58	145
⑩女性は閉経すると性欲はなくなる	48	157
⑪高齢者の性行為はいやらしい感じがする	73	133
⑫高齢者にも自慰行為がある	50	50
⑬閉経後に性行為をするのは不自然だ	31	177
⑭高齢者の結婚は家族に経済的な負担をかける	48	159
⑮高齢者の再婚は好ましい	167	41
⑯高齢者の結婚は家族にとって恥ずかしいことだ	25	182
⑰高齢者は枯れるべきだ	14	193
⑱年をとってから余りおしゃれをするのは変だ	4	204
⑲高齢者の交際は茶飲み友達程度にするべきだ	133	73
⑳いくつになっても恋愛をすべきだ	199	9

る態度とは必ずしも一致しているとは言えなかった。性に対する一般的態度と老年期の性に対する態度の関係をさらに分析するために，以下の処理を行った。

(2) “一般的な性に対する態度” から以下の手続きで“偏見度”得点を算出した。5つの各質問項目に対する“はい”という回答を，偏見を持った回答とみなした。そして個人がこれらの項目に“はい”と答えた数を加算して，その被験者の偏見度得点(0～5)とした。さらに全被験者を偏見度得点が3未満の者と3以上の者の2群に分けて(表2)，それぞれの群の被験者が“老年期の性”に関する質問(⑥～⑳)にどう回答したか，についてクロス集計を行った(表3)。その結果，老年期の結婚に対する態度には，性一般に対する態度(偏見度)との間に関連が認められなかった。また老年期の社会生活・対人行動についても，“茶飲み友達”について

老年期の性意識・性行動に関する調査研究 I

表 2. 偏見度得点 (本文参照) 別の分布

偏見度得点	人数	%
0～2 (低偏見群)	117	54.9
3～5 (高偏見群)	96	45.1

表 3. 偏見度得点群による各質問項目に対する反応の違い

質問項目	高偏見群		低偏見群		
	はい	いいえ	はい	いいえ	
⑥	22	74	1	116	**
⑦	55	41	83	34	*
⑧	10	86	5	112	n.s.
⑨	34	60	25	89	*
⑩	30	66	19	95	*
⑪	42	54	32	83	*
⑫	42	52	60	51	n.s.
⑬	23	73	8	109	**
⑭	22	74	26	90	n.s.
⑮	74	22	98	19	n.s.
⑯	13	83	12	104	n.s.
⑰	9	87	5	111	n.s.
⑱	1	95	3	114	n.s.
⑲	72	24	62	53	**
⑳	92	4	112	5	n.s.

** $p < .01$ * $p < .05$

の質問を除いて、性一般に対する態度とは関連が認められなかった。これに対して、老年期の性に対する態度の多くは、性一般についての態度と関連が認められた。したがって性一般に対して保守的な態度をとるものは、老年期の性についても同じ態度をとる傾向があるが、老年期の結婚に対しては必ずしも否定的とは限らない。また逆に性一般に寛容な者でも、老年期の結婚や異性を含む対人関係に関して受容的とは言えない。

つぎに老年期の性に対する態度と、老年期の結婚・対人行動についての態度との間の関係をさらに検討するために以下の分析を行った。

(3) “老年期の性に対する態度”を、“性行為”“結婚”“性に関連する社会的態度”の3つの下位カテゴリーに分類し、(2)と同様の手続きで偏見度得点を各被験者ごとに算出した。ただし、質問⑦⑫⑮⑳については“いいえ”回答に偏見度得点を与えた。3つのカテゴリー間の関係を検討するために、相関係数(Pearsonの積率相関係数)を求めた結果を表4に示す。いずれも統計的には有意な相関が認められた($p < .01$)が、性と社会性(対人行動)の間の相関が最も高く、

表4. 女子大学生の老年期の問題に関する
態度間の相関

	性	結婚	社会性
性	1.000		
結婚	.242	1.000	
社会性	.477	.245	1.000

性と結婚，結婚と社会性との相関は低かった。すなわち，女子大学生において老年期の性の問題は社会性・対人行動の問題と関連づけられており，これに対して老年期の結婚の問題は性や社会性の問題とはやや関連が薄いと捉えられていた。

1-2. 壮年期における老年期の性に対する態度，および調査1のまとめ

女子大学生の家族40歳以上のもの33名(男性4名，女性29名)について，同一の質問紙による調査結果を分析した。各質問項目に対する回答(“はい”，“いいえ”の比率)について，女子大学生の結果と比較した。その結果，女子大学生との間に統計的に有意な差が認められた項目は，①③②の3項目のみであった。一般的な性に関する質問①③においては，女子大学生よりも保守的，否定的回答が多かった。これに対して老年期の性に関する②においては，女子大学生よりも肯定的であった。したがって壮年期においては，女子大学生における結果とほぼ同様の結果であったと言える。

“偏見”に関する本調査の結果から，女子大学生およびその家族における老年期の性に関する態度は，従来の研究が示唆するよりも受容的・肯定的であることが示された。老年期の性行動に関しては，性一般に対する態度と関連が認められ，特に老年期の性行動に対してのみ“偏見”が存在するとは言えない。また老年期の対人関係と結婚との関連を見ると，性の問題は対人関係を含む社会性の問題と関連して捉えられており，結婚の問題はこれと異なる観点で理解されていることが示唆された。したがって老年期の性に関する問題を，その周囲の理解(あるいは偏見)という観点から解決しようとする場合には，性行動自体と老年期の結婚とは異なる事象として理解されている，という点を考慮に入れる必要性が示唆された。換言すれば，家族および若年層は，老年期の性の問題を対人行動の1つの側面として理解し，受容することが可能であって，これは高齢者の性を含む生活改善に有効に作用すると思われる。

次に，老年期の性活動および関連する心理的諸側面の実態についての調査結果を述べる。

Ⅱ. 老年期の性活動に関する調査

目的

われわれの最終的な目的は、老年期の性活動の実態を把握することと共に、老年期における恋愛の感情について概要を把握することにある。さらには老年期の恋愛感情と、青年期・壮年期の恋愛感情との比較を行うことにある。本研究をこの目的のための予備研究として位置づけたい。青年期、壮年期の恋愛感情との比較をする前に、老年における性活動や、これにともなうと考えられる恋愛感情とは、どのような性質を持ったものであるかが本研究の目的であった。作成された質問紙の項目には多少の重複や、設問設定の不自然さが残るものであったが、次回調査につなげる点では意味のあることであった。

一般的にどの年代に関しても、その性活動を考える場合、当然のことながらその背景となる恋愛の感情、対人関係などについてあわせて検討することは妥当な問題設定と考えられる。恋愛感情に関する研究の多くにおいては、青年期に関することであり(例えば松井, 1990), 諸研究の質問項目がそのまま老年期に関する質問項目に当てはまるかどうかは不明である。

そこでわれわれは老年期の性活動に関する質問項目には井上ら(1991), 高橋(1984)の研究で用いられた質問項目を参照し、恋愛感情に関する質問項目については松井(1990)を参照した。さらにマーレーの12欲求をもとに作成されたパーソナリティ検査の一つである EPPS の中から、異性愛尺度と負の相関の高かった2尺度(他者認知, 持久)から各2項目, 正の相関の高かった2尺度(救護, 変化)から各2項目を選出した。また日常的な健康の項目を加えて, 計74項目の質問紙を作成した。

分析はまず性交渉のあるなしと性別, 年齢, 配偶者の有無との関連を調べた後に, 分類された項目間の相関関係によって性活動との関連の項目を探った。

方法

被験者：千葉県東金市在住で、老人クラブで活動をしている60歳以上、80歳未満の健常な男女であった。年齢、性別、配偶者の有無に関して各被験者の構成人数は表5に示した通りであった。

調査期間：平成4年8月から10月まで。

表5. 被験者の人数構成

年齢	性別	配偶者	人数
70歳未満	男性	有	17
		無	7
	女性	有	11
		無	7
70歳以上	男性	有	4
		無	5
	女性	有	2
		無	9
総数			62名

手続き：74項目からなる質問紙に対して、各被験者に個別の聞き取り調査を行った。検査者はそれぞれの質問項目を読み上げ、これに対して「はい」か「いいえ」の2件法で回答をお願いした。通常の質問紙法の場合には、「わからない」や「どちらでもない」といった回答項目を挿入することが一般的であると思われる。本調査の場合には、無回答項目が頻出することを防ぐために、あえて強制的な2件法を取ることにした。

被験者一人当りの施行時間は、平均約30分であった。

質問紙項目：

質問の項目を大別すると、1)生活・健康の状態に関する項目、2)性行動・性的興味に関する項目、3)結婚生活のあり様に関する項目、4)異性に対する感情・恋愛などに関する項目、5)家族などとの対人関係に関する項目、6)老いに対する受容感に関する項目であった。

表6に具体的項目を示した。表中の先頭番号は質問の順番であった。

なお聞き取りに際して、配偶者がある被験者に対して、「交際相手」という言葉のある質問項目は「配偶者」もしくは「好きな異性」・「交際相手」とし、配偶者の無い被験者に対して「配偶者」という言葉のある項目は「交際相手」・「好きな異性」と随時読み代えて聞き取りを行った。

結果と考察

(1) 「私は現在でも性交渉がある」と年齢差、性差、配偶者の有無について

調査の結果では、現在でも性交渉があるかについて、年齢、性、配偶者別の回答は表7の通

老年期の性意識・性行動に関する調査研究 I

表 6. 老年期の性活動 聞き取り調査質問項目

-
- (1) 生活・健康について
1. 私は健康である
 - 2. 現在, 病院にかよっている
 3. 配偶者は健康である
 4. 私は, 現在熱中しているものや趣味がある
 5. 体を動かすことが好きである
 12. 毎日の生活は充実している
 18. やりかけた仕事は, 一生懸命やりたい
 - 19. 「寂しい」と感じることもある
 23. 経済的に安定した生活がほしい
 31. 新しいことや違ったことをやってみたい
 - 49. 何もする気になれない
 59. やり始めた仕事は, 終わりまでやりとげたい
 67. 自分の動機や感情を分析してみたい
- (2) 性活動・性的興味
7. 色っぽい話をしたり, 聞いたりするのが好きだ
 10. 異性を好きになる感情は, 若い頃と比べると穏やかである
 20. 若い頃, 性的欲求は強かった
 - △ 21. 肉体的接触よりも, 精神的な愛情やいたわりを望んでいる
 25. 性的なことを想像する
 28. 若い異性とつきあいたい
 29. 性的な夢を見ることもある
 32. 異性と手を握ったり, 腕を組んだりする
 34. ふとしたきっかけで性欲がわく
 45. 特定の異性と個人的につきあいたい
 61. 私は, 毎日同じ部屋で (配偶者などと) 枕を並べて寝ている
 69. 異性の肩をたたいたり, 体にふれることがある
- (3) 結婚生活
11. 結婚は恋愛結婚だった
 - 16. 高齢者の結婚は人生を充実させる
 - △ 24. 過去の結婚生活は充実していた
 - 40. いまさら恋愛や結婚をするのはめんどろだ
 - 41. 高齢者の交際や結婚についての周囲の人の理解がない
 - △ 48. 若い頃, 配偶者以外の人で結婚したかった人がいる
 - 62. 私は年を取るにつれて性に対しての興味や関心が減少した
 - 65. 子どもたちに反対されて, 異性との交際や結婚をあきらめたことがある
 68. 悩みを聞いてくれるのは夫, あるいは妻である
 74. 現在の結婚生活は充実している
-

(4) 異性

- 8. 結婚をしたいと思う相手がいる
- 13. 交際相手にプレゼントを贈るか、贈られたことがある
- 14. 異性の交際相手がいたらきっと毎日が楽しい
- 17. 何でも話せる異性の友達がいる
- 22. 通い夫（妻）をしている
- 26. 特別な用がなくても会いたいと思う相手がいる
- 30. 交際相手とお互いの家族や友人の話をする
- △33. 交際相手をぶったことがある、またはぶたれたことがある
- 36. 婚約ではないが、結婚の約束をした異性がいる
- 42. 交際相手と一緒に食事をするのは楽しい
- △46. 交際相手と別れたいと思ったことがある
- △47. 高齢者の恋愛は性行為よりも心が通い合うことが大切だ
- 50. 異性と話すことは楽しい
- 52. 私は現在でも性交渉がある
- 53. 交際相手と二人だけで散歩や旅行をする
- 54. 恋人を子どもたちに紹介したことがある
- △55. 交際相手と口げんかをしたことがある
- △58. 青年と高齢者の恋愛はまったく異なる
- △60. 好きな人がいるが財産や子どもたち、世間体などを考えるとその人に打ち明けることができない
- 63. 交際相手の家や部屋へ遊びに行く
- 64. 異性と仲よくしたい
- 71. 私は現在恋愛中である
- 72. 好ましい相手と出会ったときに、若い頃のように燃えると思う
- 73. 交際相手のことを考えただけで胸がドキドキする

(5) 対人関係

- 6. 子どもたちと一緒に暮らしたい
- 9. 何かことがあった場合、人はそれをどう感じているのか知りたい
- 37. 初対面の人と会うのが好きである
- 38. 恋愛や結婚の悩みを誰に相談して良いのかわからない
- △39. 誰かに頼りたいと思うときがある
- △43. 友達からちょっとした数々の行為を気持ちよく示してもらいたい
- 51. 病気になったとき、友達からいたわってもらいたい
- △56. 病気になったら、他人の世話になるのはいやだ
- △57. 男女問わず、皆でつきあいたい

(6) 受容

- 15. 若い頃に比べると、いろいろの面で衰えた
 - 27. 自分の人生は上出来だ
 - 35. 最近、自分が年を取ったと思う
 - 44. 若い頃、年を取るのが恐ろしかった
-

- 66. 私は心身ともに老人である
70. 年を取るのはすばらしいことだ

表7. 「私は現在でも性交渉がある」の回答度数

	性別	配偶者	「私は現在でも性交渉がある」	
			はい	いいえ
60歳～70歳未満	男性	有	15	2
		無	2	5
	女性	有	8	3
		無	0	7
70歳以上	男性	有	1	3
		無	1	4
	女性	有	1	1
		無	0	9

りの人数であった。「私は現在でも性交渉がある」項目(2)×年齢段階、性別、配偶者の有る無しの各群(8)の χ^2 検定の結果、1%水準で有意な差異が認められた。表7に示す通り、特に女性の場合、配偶者の有無と性交渉の有無とは、密接に関連していることが明らかであった。

高橋(1984)は女性の性的欲求の程度は配偶者の有無の影響を強くうけることを指摘している。すなわち女性は生理的には性交渉が可能であるにも関わらず、配偶者の無い場合、性的欲求を喪失するという。

われわれの結果は、配偶者の無い女性は、性交渉そのものも喪失することを示した。

当然のことながら性交渉に対する男女差、配偶者の有無差に関する要因に関するさらなる分析が必要である。ただし収集されたデータは総数で62名と小数である。そのために性別、年齢段階、配偶者の有無の要因それぞれについての詳細な分析は、統計的に意味をなさないことが予想される。そこで、予備調査段階における結果の整理として、年齢段階をプールすることにした。特に必要が認められた場合を除いて、主たる分類変数は、性別と配偶者の有無にして、性交渉に関連する事項は何であるかについて検討することにした。

(2) 「私は現在でも性交渉がある」と諸項目の関連について

2-1. 男性、配偶者有り群

年齢段階をプールして、男性・配偶者有り群について「現在でも性交渉がある」項目と他の

73項目との χ^2 検定を行った。その結果、5%レベルで有意な差異が認められた項目は、1)生活・健康に関する項目(現在、病院に通っている、配偶者は健康である)、2)性行動・興味に関する項目(色っぽい話を見たり聞いたりするのが好きだ、性的なことを想像する、若い異性につきあいたい、ふとしたきっかけで性欲がわく、特定の異性と個人的につきあいたい)、3)結婚、恋愛、異性に対する恋愛感情に関する項目(結婚は恋愛結婚だった、交際相手と二人だけで散歩や旅行をする、男女問わず皆でつきあいたい、青年と高齢者の結婚は全く異なる、私は現在恋愛中である、現在の結婚生活は充実している)、4)老いに対する受容・態度に関する項目(自分の人生は上出来だ、私は心身ともに老人である)、5)対人関係に関する項目(初対面の人と会うのが好きである)の計16項目であった。

男性・配偶者有り群に関しては、現在でも性交渉があるかどうかを分ける項目は、性活動に関する項目だけでなく、諸活動全般にわたり多面的であることが示された。

2-2. 男性、配偶者無し群

年齢段階をプールして、男性・配偶者無し群について「現在でも性交渉がある」項目と他の73項目との χ^2 検定を行った結果、5%レベルで有意な差異が認められた項目は、1)健康に関する項目(現在、病院に通っている)、2)性行動・興味に関する項目(色っぽい話を見たり聞いたりするのが好きだ、私は年を取るにつれて性に対しての興味や関心が減少した)、3)結婚、恋愛、異性に対する恋愛感情に関する項目(交際相手の家や部屋に遊びにゆく)、4)老いに対する受容・態度に関する項目(私は心身ともに老人である)の計6項目であった。

男性の配偶者無し群は、有る群に比べ、性交渉のある無しを分ける項目は少なかった。また、性交渉のある無しを分ける項目は比較的に性活動そのものに関わる項目に関連が認められることが示された。

男性・配偶者有り群と無し群とで共通して有意な差異が認められる項目は、「現在病院に通っている」、「色っぽい話を見たり聞いたりするのが好きだ」、「私は心身ともに老人である」の3項目であった。

配偶者の有る、無しに関わらず男性に共通して認められた点として、性交渉があると答えた男性は、現在病院に通っておらず、色っぽい話を見たり聞いたりすることが好きであり、私は心身ともに老人ではないと考える男性であった。

2-3. 女性、配偶者有り群

年齢段階をプールした女性・配偶者有り群について「現在でも性交渉がある」項目と他の73

項目との χ^2 検定を行った結果、5%レベルで有意な差異が認められた項目は、1)生活、健康に関する項目(私は健康である、私は現在熱中しているものや趣味がある、自分の感情や動機を分析してみたい)、2)異性に対する恋愛感情に関する項目(交際相手と別れたいと思ったことがある、交際相手と二人だけで散歩や旅行をする)の5項目であった。

男性の配偶者有り群の結果と、女性の配偶者有り群の結果とを比較すると、女性の方が、性交渉があるかないかを分ける項目は少ないことが示された。

また男性の結果とは異なり、現在においても性活動があるかどうかを分ける項目は、性活動そのものに関する項目ではなく、生活や健康といった現在の自分の状態に関する要因であることが示された。

(1)と(2)のまとめ

結果を要約すると、

- 1) 男性配偶者有り群では、性交渉のある無しに差異の認められた項目は、日常生活全般にわたった。
- 2) 男性配偶者無し群では、性交渉のある無しに差異の認められた項目は、比較的性活動そのものに関する項目であった。
- 3) 女性配偶者有り群では、性交渉のある無しに差異の認められた項目は、性活動そのものに関する要因ではなく、現在の自分の状態に関する項目であった。
- 4) 女性配偶者無し群では、性交渉そのものが喪失することが示された。

従来 of 諸研究において、性差、配偶者の有無は、性交渉、性欲求に密接に関連することが指摘されてきた。本調査においても、これら諸要因が重要であることが示された。

さらに本調査の結果から、男性の配偶者あり群については、性交渉がある男性は、日常的活動の水準も比較的の高いことも考えられる。

また得られた結果で、女性の性交渉の有無に差異の認められる項目に、具体的に性活動と結びつく項目が少なかった。このことは多くの先行研究で指摘されているように、性活動に対する主体性の欠如とも関連して考えることも出来よう。

(3) 質問項目間の関係について

74項目の関係について、現段階において全項目間のクロス集計を行うことも肝心な分析方法であるとも考えられるが、分類の可能な諸項目群の関連を相関分析によって確かめ、性交渉の有無との関係を見いだすことが最も基本的であると考えられる。そこで先に述べた6つのカテ

表 8. 配偶者の有無, 性別, 年齢別, 健康状態, 性交渉の有無による各カテゴリー平均得点の比較

	健康	受容	結婚	異性	性	対人	
配偶者	有	11.1(1.89)	2.2(1.24)	4.2(0.85)	7.3(2.30)	6.4(2.95)	3.7(0.82)
	無	9.0(2.99)	2.1(1.26)	3.6(1.17)	9.0(4.59)	3.7(3.51)	4.1(0.77)
					*		
性別	男	11.2(1.76)	2.6(1.20)	4.4(0.78)	9.2(3.17)	7.1(2.75)	4.1(0.83)
	女	9.0(2.98)	1.5(0.99)	3.4(1.04)	6.8(3.63)	2.9(2.71)	3.6(0.73)
					**		
年齢							
	70以上	8.8(2.96)	1.6(0.92)	3.0(1.02)	6.8(4.13)	3.0(3.02)	3.6(0.92)
	70未満	10.9(2.19)	2.4(1.31)	4.4(0.73)	8.7(3.13)	6.3(3.13)	4.7(0.73)
健康 (質問番号1)							
	良	11.8(1.09)	2.6(1.25)	4.2(0.79)	9.4(3.17)	6.9(2.56)	4.2(0.73)
	不良	7.5(2.15)	1.4(0.83)	3.4(1.17)	5.8(3.07)	2.3(2.66)	3.3(0.64)
		**	*		**	**	**
性交渉 (質問番号52)							
	有	11.9(1.56)	2.6(1.40)	4.5(0.64)	8.6(3.03)	7.7(2.39)	4.2(0.74)
	無	8.6(2.56)	1.7(0.95)	3.5(1.07)	7.6(3.94)	3.2(2.74)	3.6(0.77)
		**		*		**	

** $p < .01$ * $p < .05$

注. 健康: 日常生活・健康, 受容: 老いに対する受容, 異性: 異性に対する感情, 性: 性行動・性的興味, 対人: 対人関係

ゴリー(日常生活・健康, 老いに対する受容, 結婚, 異性に対する感情, 性行動・性的興味, 対人関係)別に得点化した。

これら6つのカテゴリー別に調査対象の回答反応を得点化するために, 各カテゴリーのテーマに対して肯定的に回答した質問項目数を得点とした。ただし表6に示した質問番号のうち, 無印のものは“はい”を1点とし, ○丸は“いいえ”を1点とした。また△印の項目は肯定とも否定とも判定できないため得点化から除外した。

3-1. 各カテゴリーの得点

各カテゴリー得点の平均を, 配偶者の有無, 性別, 年齢別(70歳以上, 未満), 健康であるか否か(質問1), 性交渉の有無(質問52)で比較した(表8)。配偶者があるものの方が, また男性の方が女性よりも性行動に関する得点が高かった。また健康であるものの方が結婚以外のすべてで得点が高かった。さらに性交渉を持つものは, 健康・結婚に関して得点が高いが, 老年期の受容・異性・対人関係の得点では高いとは言えなかった。なお, 全体として異性・性行動に

ついでに得点は分散すなわち個人差が大きいことが認められた。

3-2. 6 カテゴリー間の関係

6つのカテゴリー間の関係をさらに詳しく分析するために、男性・女性と配偶者の有無によって4群を区別し、この4群別に6カテゴリーの得点間の相関を求めた(表9-1～表9-4)。

得られた結果を要約すると、

- (1) “男性・配偶者有り”群では、健康・性・受容・異性間に有意な相関が認められ、また結婚と性の間に相関が認められた。
- (2) “男性・配偶者無し”群では、受容と異性、および異性・健康・性の間にそれぞれ有意な

表9-1. 男性・配偶者有り群における6カテゴリー間の相関分析

	健康	受容	結婚	異性	性	対人関係
健康	1.000					
受容	.753**	1.000				
結婚	.382	.287	1.000			
異性	.663**	.698**	.406	1.000		
性	.729**	.707**	.605**	.770**	1.000	
対人関係	.431	.322	.168	.377	.546	1.000

** $p < .01$

健康：日常生活・健康, 受容：老いに対する受容, 異性：異性に対する感情, 性：性行動・性的興味

表9-2. 男性・配偶者無し群における6カテゴリー間の相関分析

	健康	受容	結婚	異性	性	対人関係
健康	1.000					
受容	.513	1.000				
結婚	-.080	-.054	1.000			
異性	.707*	.714**	-.157	1.000		
性	.711**	.660*	.035	.861**	1.000	
対人関係	.337	.065	-.072	.499	.543	1.000

** $p < .01$ * $p < .05$

健康：日常生活・健康, 受容：老いに対する受容, 異性：異性に対する感情, 性：性行動・性的興味

表9-3. 女性・配偶者有り群における6カテゴリー間の相関分析

	健康	受容	結婚	異性	性	対人関係
健康	1.000					
受容	.261	1.000				
結婚	.432	.313	1.000			
異性	.646*	.234	.547	1.000		
性	.579*	.109	.556*	.534	1.000	
対人関係	.576*	.278	-.168	.311	.194	1.000

** $p < .05$

健康：日常生活・健康, 受容：老いに対する受容, 異性：異性に対する感情, 性：性行動・性的興味

表9-4. 女性・配偶者無し群における6カテゴリー間の相関分析

	健康	受容	結婚	異性	性	対人関係
健康	1.000					
受容	.643**	1.000				
結婚	.587*	.332	1.000			
異性	.865**	.724**	.640**	1.000		
性	.704**	.869**	.475	.843**	1.000	
対人関係	.739**	.370	.516	.697**	.581*	1.000

** $p < .01$ * $p < .05$

健康：日常生活・健康, 受容：老いに対する受容, 異性：異性に対する感情, 性：性行動・性的興味

相関が認められた。

(3) “女性・配偶者有り”群では6つカテゴリーのいずれの間にも有意な相関が認められなかった。

(4) “女性・配偶者無し”群では、異性関係が他の5つのカテゴリー全てと有意な相関を持っていた。また性・健康・受容の間, 対人関係・健康の間にも相関が認められた。

以上の男女別・配偶者の有無による分析から、配偶者のいる女性では1つのカテゴリーの反応が他のカテゴリーの反応と関連を持たないことが特徴的である。これは男性に比べて、配偶者のいる女性の健康・心理・性的行動が相互に影響せず、独立に機能していることを示している。一方、配偶者のいない女性においては、異性関係の程度が他の全ての反応と関連し、健康・受容をはじめとする他の要素の重要な指標となり得ることを示している。

次に、全調査対象者について6 カテゴリー間の相関を求め、全体に共通する傾向を分析した(表10)。

全対象者の回答結果について、その背景となる因子構造を明らかにするために、因子分析(主成分法、バリマックス回転)により因子を抽出した。その結果、寄与率の特に高い1因子(寄与率 .64)が抽出され、第3因子までで全体の変動の86パーセントが説明された。第1因子は(受容, 肯定, 楽観: 因子負荷量 .894)および(異性との関係: 因子負荷量 .817), 第2因子は(結婚に関して: 因子負荷量 .944), 第3因子は(対人関係: 因子負荷量 .949)を含んでいた。また性に関する項目と健康に関する項目は、第1因子, 第2因子および第3因子のすべてに属しており、それぞれ(性: 因子負荷量 .589, .565, .415), (健康: 因子負荷量 .494, .521, .525)であった。

今回の質問項目群に対する回答から、特に回答反応を特徴づける因子は、まず老年期を積極的に受容するか否かと、異性との関係を肯定的に捉えているか、という事柄であったと言える。老年期の受容と、配偶者を含む異性との関係のあり方が密接に関連するということができよう。さらに第2, 第3の因子として結婚に関連した事柄と対人関係に関する事柄が、別々に回答反応を構成していたと言える。さらに健康と性の問題が密接に関連しながら、これら3つの因子に共に関わっている。つまり老年期における性の問題が、健康の問題と直接に結びつく事柄であり、老年期の心理的受容・異性関係や結婚・対人関係のすべてに関わると考えられる。

老年期の生活・行動に関する6つのカテゴリーに関する分析結果から、次の点が指摘できよう。(1)高齢者自身の日常生活・性・対人関係および心理的諸問題を全体として捉える時、老年期の心理的受容と、配偶者を含む異性関係のあり方が最も重要な要因として推定されること。

表10. 全対象者における6 カテゴリー間の相関分析 (N=63)

	健康	受容	結婚	異性	性	対人関係
健康	1.000					
受容	.585**	1.000				
結婚	.589**	.398**	1.000			
異性	.614**	.655**	.446**	1.000		
性	.766**	.697**	.648**	.623**	1.000	
対人関係	.590**	.369**	.332**	.425**	.564**	1.000

** $p < .01$

健康: 日常の生活・健康, 受容: 老いに対する受容, 異性: 異性に対する感情, 性: 性行動・性的興味

(2)結婚に関する事柄、および対人関係に関する事柄は(1)の問題とは区別されること。(3)健康と性の問題はこれらすべての側面に関わっていること。(4)老年期の女性の場合、特に配偶者の有無によって影響を受け、配偶者のいる場合は諸側面を相互に独立にとらえることが可能であるが、配偶者がいない場合には異性との関わり方に生活全体の水準が現れる傾向があること。

結 論

本研究は、老年期における性活動とその背景となる恋愛感情や他の生活に関する意識の実態、および周囲の若年層・家族における老年期の性への態度を調査し、高齢者の生活の質的向上に資することを目的として行われた。

まず、女子大学生とその家族における老年期の性に対する態度は、従来指摘されてきたような偏見を含むとは言えなかった。すなわち吉沢(1986)に指摘されているような、老年期における性欲の否定、老人の性行為の不潔視、等はわれわれの調査では認められなかった。本研究において、家族および若年層は老年期の性の問題を対人行動の1つの側面として理解し、受容することが可能であることが示唆された。この結果は、高齢者の性を含む生活改善の方策を、高齢者をとりまく人的環境の面から考える際に、有効な資料であると思われる。

老年期の性活動を中心とする実態調査では、まず性別・配偶者の有無によって、性交渉の有無に関連する質問項目を分析した。

男性・配偶者有り群に関しては、現在でも性交渉があるかどうかを分ける項目は、性活動に関する項目だけでなく、諸活動全般にわたり多面的であることが示された。男性の配偶者無し群は、有る群に比べ、性交渉のある無しを分ける項目は少なかった。また、性交渉のある無しを分ける項目は比較的に性活動そのものに関わる項目に関連が認められることが示された。すなわち配偶者のない男性は性的感情や活動のみが性交渉に関わるのに対し、配偶者のいる男性は、より広範囲の活動・心理状態が性活動と関連していた。

男性の配偶者有り群の結果と、女性の配偶者有り群の結果とを比較すると、女性の方が、性交渉があるかないかを分ける項目は少ないことが示された。また男性の結果とは異なり、現在においても性活動があるかどうかを分ける項目は、性活動そのものに関する項目ではなく、生活や健康といった現在の自分の状態に関する要因であることが示された。また、女性配偶者無し群では、性交渉そのものが喪失することが示された。

従来の諸研究において、性差、配偶者の有無は、性交渉、性欲求に密接に関連することが指摘されてきた。本調査においても、これら諸要因が重要であることが示された。

さらに老年期の性活動を中心とする生活の諸側面を健康・老年期の心理的受容・結婚・異性との関係・性活動・対人関係の6カテゴリーに分けて、それらの関係を相関係数を指標として分析した。

配偶者のいる男性では、健康・性・受容・異性関係の間に相関が認められ、また配偶者のない男性でも受容と異性、および異性・健康・性の中に相関が認められた。男性では性と健康の問題が関連していることが特徴的であった

女性の場合、配偶者のいる女性では6カテゴリーの間に統計的に有意な相関は認められなかった。また配偶者のいない女性では、異性関係の程度が他の全てのカテゴリーと関連していた。特に女性において配偶者の有無が、生活全般の活動と心理的状态に大きく影響することが示唆された。

老年期の実態に関する本調査から、高齢者の生活向上のための問題点には、男性と女性による違いがみられることが示唆された。男性においては健康の問題と性の問題が常に関連することに留意すべきである。これに対して女性の場合には、配偶者の有無により性活動が規定され、さらに生活の諸側面の関係が異なることが推測される。

引用文献

- Bretschneider, J.G. & McCoy, N.L. 1988 Sexual interest and behavior in healthy 80- to 102-year-olds, *Archives of Sexual Behavior*, 17(2), 109-129
- 大工原 秀子 1991 性ぬきに老後は語れない ミネルヴァ書房
- 井上 勝也, 荒木 乳根子, 大川 一郎 1991 老年期のセクシャリティに関する研究 *老年社会科学* 13, 145-161
- Kinsey, A.C., Pomeroy, W.B. & Martin, C.E. 永井 潜, 安藤 画一(共訳) 1955 人間における男性の性行為(上下巻) コスモポリタン社
- 松井 豊 1990 青年の恋愛行動の構造 *心理学評論*, 33(3), 355-370
- Pfeiffer, E., Verwoerdt, A. & Davis G.C. 1972 Sexual Behavior in the middle life, *Amer. J. Psychiat.*, 128: 10, 1262-1267.
- 高橋 久美子 1984 老年期の性—老人の性意識と再婚意志の分析 *家政学雑誌*, 35(4), 276-286
- 吉沢 勲 1986 老人と性的問題 *臨床精神医学*, 15(11), 1779-1783